



震災で避難している子どもの支援活動報告

ふくしまの 子どもたちとともに



東日本大震災と原発事故以後、
悲しいことも苦しいことも楽しいことも嬉しいことも
ともに分かち合って紡いできた日々。
色々なことがあったけれど、

笑顔で歩いていく

震災、原発事故で「あたりまえ」が変わった

豊かな自然に囲まれた福島県では東日本大震災と原発事故により、子どもたちにとってあたりまえだった日常が変わってしまいました。多くの子どもたちが県内だけでなく県外へも避難し、家族や友達とバラバラになってしまったのです。

そして、福島の子どもの暮らしは、震災と原発事故から7年経った今でも変化し続けています。



【福島県内での活動地域】

子ども(18歳未満)の避難者数

(出典：2017年10月1日発表、福島県)

年次	避難者数	県内	県外
2012. 4.1	30,109人	12,214人	17,895人
2013. 4.1	29,148人	13,332人	15,816人
2014. 4.1	26,067人	12,759人	13,308人
2015. 4.1	23,498人	12,006人	11,492人
2016. 4.1	21,428人	11,582人	9,846人
2017. 4.1	18,910人	10,286人	8,624人

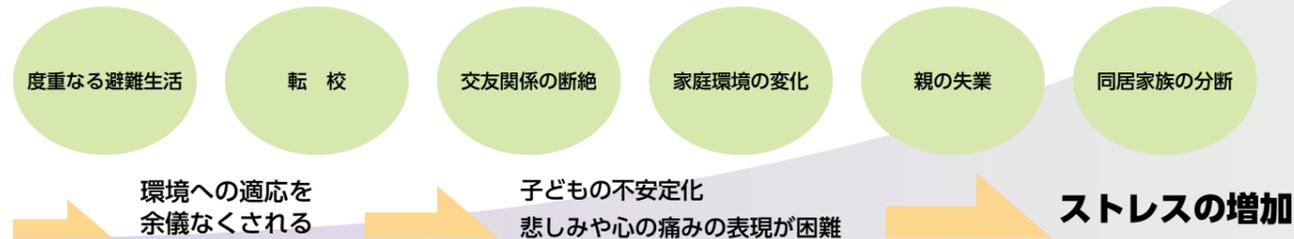
あのときの記憶 ～子どものエピソード～

震災当日に雪が降ってきて、それを見てはしゃいでいました。福島沿岸地域で雪が降るのは珍しいことなので、うれしかったという記憶があります。内陸部にある避難所に着くと雪が積もっていて、初めて雪あそびをしました。1人でずっと雪だるまを作っていました。そこに、原発が爆発したという情報が入り、雪をいじるのはダメだと言われたのです。(当時8歳)



あたりまえだった日常の変化

当時、このようなことが起きていました。



このような子どもたちのストレスの増加や、家族やコミュニティの支えが弱くなってきている歪みは必ずどこかに出てくるだろうという心配があり、避難する子どもたちの生活に寄り添った支援が必要とされていました。

立ち上がった取り組み

仮設住宅での学習と遊びの支援

～学校外の家庭や地域の中で子どもたちを支えるために～

2011年9月から複数の仮設住宅をまわり、子どもたちに対して学習支援を行いながら、実際にどのようなニーズがあるのかを探りました。そして、**2つの目的**を掲げ、仮設住宅の集会所をお借りして、学習と遊びの支援を行うことになりました。

活動の目的



① 子どもの孤立防止

1つの仮設住宅の中でも、学校や元々住んでいた地域が異なるなど、お互いに相手のことをよく知らないため、子ども同士、また子どもがいる世帯同士でもお互いに関わる機会があまりありませんでした。そこで、まずは子どもたちが集まれる居場所をつくり、子どもたちがゆるやかにつながることを目指しました。



② 子どもを支えていく力を取り戻す

避難生活で大人は精一杯であり、子どもをケアしたり支えていったりすることが大変でした。そこで、生活に寄り添いながら地域の人々や保護者の方が子どもを支えていく力を取り戻していけるように、仮設住宅を訪問し、学習と遊びの支援を行いました。保護者の方や住民がつながり一緒に子どもを見守っていけるように、大人も一緒に参加できるイベントを開催したり、学習支援を一緒に行ったりして、仮設住宅内のコミュニティ形成の支援を行いました。

支援活動を始めた当初の子どもたちの様子は…

すぐにかんしゃくを起こす

大きな声を出して走り回る

津波ごっこ、地震ごっこなど、災害時の状況を再現した遊びをする



スタッフをわざと怒らせるような態度をとる

時間になってもなかなか帰りがらない

次のページからそれぞれの地域での取り組みを紹介します。

子どもたちの生活環境の変化

発災

- 1次避難所 (学校の体育館など)
- 県外へ避難

2011年3月～5月初旬

- 1次避難所
- 県外避難
- 公営住宅、借り上げ住宅(みなし仮設住宅)へ移動
- 2次避難所へ移動 (ホテルや旅館など)

2011年5月～8月頃

- 応急仮設住宅へ移動
- 借り上げ住宅へ移動
- 県外避難

2011年9月～

応急仮設住宅

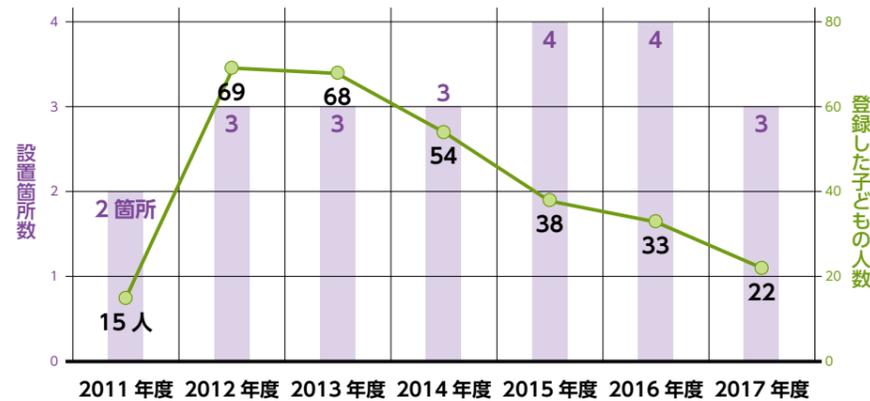


県北地域での取り組み



仮設に住む子どもたちを最後の1人まで支えるために

県北地域では、東日本大震災が起きた年の12月から、福島市、二本松市を始めとした仮設住宅で、平日夕方の学習と遊びの支援を開始しました。当初は中学生を対象としていましたが、のちに小学生も加わりました。



当初は、子どもの育ちの環境として様々な課題を抱えていた2カ所の仮設住宅で支援を始めました。この取り組みが知られていく中で、他の仮設住宅からも支援をして欲しいという要望が寄せられたり、支援を続けていくことができなくなった団体の活動を引き継いだりしながら、子どもが集える場を拡充していきました。一方で、仮設住宅からの退去等による暮らしの変化とともに、1カ所あたりの参加人数は減っていきました。



平日の夕方から夜にかけて、仮設住宅1カ所につき週2回開催しました。この学習と遊びの支援が目指してきたのは、子どもの**居場所づくり**です。自分の空間を持つことが難しい仮設住宅、そこから離れた学校への通学など制限の多い生活の中で、子どもが子ども同士や大人と関わりながら安心して過ごすことの出来る場をつくることを大切にしました。

学習と遊びの支援はこのように行っています

開始の時間が近づくと、小学生が会場である仮設住宅の集会所へ。すらすらと宿題を進める子どももいれば、友達とのおしゃべりに夢中でなかなか進まない子どももいます。分からない問題があったり宿題に集中できなかつたりする子どもには、スタッフが一緒に取り組みます。途中におやつ時間を挟んで過ごしています。

小学生が帰ると中学生の時間。部活動の後で疲れているなか、大人を捕まえて学校や塾の課題にひたすら取り組む子ども、勉強もそっこのけで友達や大人とずっと話をしている子ども、勉強道具を全く持って来ない子どももいます。どんな過ごし方であれ、参加し続ける子どもには居心地のいい空間になっています。

この活動は、子どもの保護者や仮設住宅の住民の皆さんが集会所に来て見守ってくださったり、数多くのボランティアの方が活動に参加して下さったりしました。



イベントの開催

普通の学習と遊びの支援だけでなく、これまで様々なイベントも実施してきました。

代表的なイベントを紹介します。



もちつくどー！

活動している仮設住宅と関わりのある施設などでもちつき会をするものです。もちつきは、餅として完成するまでに細かい手順があるため、仮設住宅の自治会を通じて、もちつき経験豊富なお年寄りにもご協力をお願いしました。世代を超えた交流の機会となり、仮設住宅におけるコミュニティの土台づくりに役立つのではないかと思います。



イベントの主な目的は…

子どものすこやかな成長を応援

仮設住宅内のコミュニケーション形成



スパリゾートハワイアンズへ行こう！

※スパリゾートハワイアンズ：福島県いわき市にある大型温水プールなどがあるレジャー施設。

仮設住宅で行っている学習と遊びの支援に参加している子どもとその保護者を対象に、2017年7月から毎年実施しています。

夏休みの恒例行事となっており、子どもたちは友達と一緒に一所懸命に遊び、笑顔あふれる活動となっています。



活動を通して、子どもたちは成長しています

学習支援を実施している復興公営住宅の集会所に先日、以前この学習支援に通っていた男の子兄弟がやってきました。兄は高校1年生、弟は中学2年生。2人とも落ち着いた柔らかい表情をしており、成長を感じた瞬間でした。この兄弟は現在も近くの仮設住宅で暮らしています。

5年前、この兄弟は当時学習支援を行っていた仮設住宅の集会所に来ると、勉強どころが大騒ぎ。集会所のあっちの窓から出て、こっちの窓から入ってくる、友達をいじめる、

兄弟げんかをするなど、この手の思い出は尽きませんでした。

この学習支援で大事にしている約束の1つは、「友達の勉強の邪魔をしない」、これが守れない場合には「帰る」。ある日、この兄弟の弟によるあまりの言動に、スタッフは「帰れ!」と怒りました。これに対して弟は「いやだ!」と、この繰り返しでした。しかし、当時兄弟の学習支援の出席率はとても高く、ほぼ毎回の出席。どうやら、この兄弟にとって学習支援はとても居心地の良い場所だったようです。



私たちの活動で一番苦しかった時期は、本格的に仮設住宅で学習支援を始めてから6ヶ月くらいまでだったかと。そんな頃、兄弟の兄がぼそっと「ありがとう」と言って帰っていったのです。それを聞いて、妙に元気になった当時のことを覚えています。

担当スタッフの声

「仮設住宅で暮らす子どもを支えたい」

これがボランティアとして初めてこの活動に参加したとき、考えていたことでした。過去に例のない災害で避難生活を送る子どもとうまく関われるか不安でしたが、子どもは明るく迎えてくれました。子どもたちのエネルギー、率直な反応、受け入れる力、適応する力、それで少し安心したのです。家族や友人との別離、慣れない土地、狭い住環境、住居から離れた学校への通学など、取り巻く状況の厳しさについては、その後少しずつ知っていくこととなりますが、そんななかでも子どもが放つ力が、関わる周囲の大人の力の源となっていることは間違いありません。

私たちはこの活動を通して、一緒に遊び、一緒に宿題をし、他愛のないおしゃべりをする、そんな関わりで少しでも子どもの日常を良いものにしたいのです。転居後も学習支援に参加し続ける子どもや、子ども支援を自分の将来の選択肢と考える子どもの姿を見ると、子どもにとって意味のある活動であると感じています。



2011年
・福島大学の学生と共同で、子ども向けの学習と遊びの活動開始
・放課後の学習と遊びの活動を安達仮設住宅(二本松市)、しのぶ台仮設住宅(福島市)の2カ所で開始

2012年
・放課後の学習と遊びの活動を佐原仮設住宅(福島市)で開始

2015年
・放課後の学習と遊びの活動を笹谷東部仮設住宅(福島市)で開始

2016年
・あつまっぺ交流館での学習と遊びの活動実施
・浪江小、津島小で放課後の学習と遊びの活動実施
・ワールド・ビジョン・ジャパンとの「福島子ども支援事業」開始(〜2018年3月)

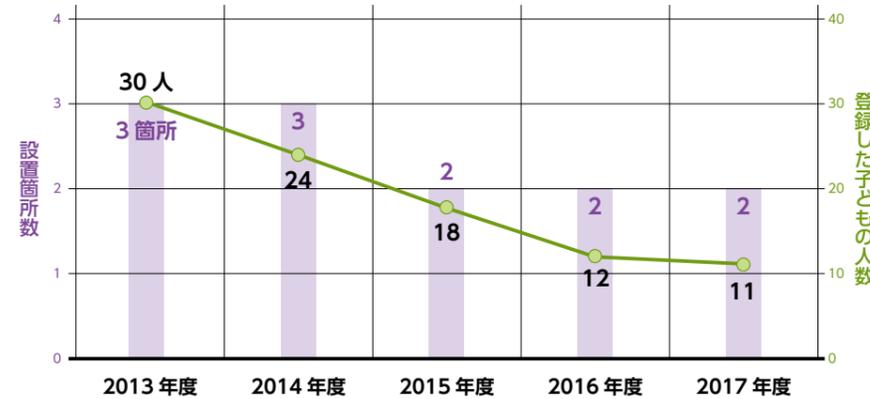
2017年
・放課後の学習と遊びの活動を石倉復興公営住宅(二本松市)で開始

県中地域での取り組み



子どもたちが安心して自由に過ごせる場を目指して

県中地域では2011年から、避難してきた子どもたちへ対して、安心して学びや遊びが出来る居場所づくりに取り組んできました。当初は、事務所を開放し活動を実施していましたが、冬休み等に実施した仮設住宅での学習支援や子ども広場の開催を機に、平日の放課後や土曜日の子どもの居場所づくりにつながりました。



2012年より、郡山市内の大規模仮設住宅に設置されたセンターを会場に、毎週こども広場を実施しました。2013年からは、不定期で訪問していた、避難した子どもたちが多く通う学校がある三春町の仮設住宅の活動も定期化しました。子どもの生活圏にそれぞれの居場所があることで、学校や家庭以外の地域の中にある第三の場として、子どもたちは仲間と関わり合いながら成長してきました。

イベントの開催

私たちの活動の主眼とする《子どもたちの健やかな生育を地域で見守る大切さ》を地域の方々と共有するイベントを開催してきました。

代表的なイベントを紹介します。



地域の仮設住宅自治会、町の行政区長の方と協働したイベントとして、2015年に実施したもち米作り体験、2016年に畑耕作体験を実施しました。2015年に実施した「もち米作り体験」では、田植え、収穫、脱穀、もちつきと、栽培したもち米を地域のみなさんと分かちあい、2016年に実施した「畑耕作体験」では、提供いただいた畑にてじゃがいも、ズッキーニ、カボチャをつくりました。収穫した作物は夏に開催された夏祭りで無料配布も行いました。



イベントの主な目的は…

コミュニティのつながりを深める

子どもの学びを地域の大人が支える



普段と違う自然豊かな環境の中で、子ども同士の交流やさまざまな体験を得られるような機会を提供しています。さまざまな個性を持った子どもたちがともに過ごす集団活動の中で、上級生が下級生に知識や経験を伝え、同年代の子どもではお互いの得意なことを活かし、苦手なことを補い合う場面が見られました。子どもたち同士がつながり、協力し合い、子ども主体で目標をやりとげる「輪の力」が育てられていると感じます。



学習サポート、こども広場 (三春の里応急仮設住宅・平沢復興公営住宅)

この事業で関わってきた子どもたちは、震災後避難先にできた仮設の学校に通学しています。それぞれの家庭は、いくつかの仮設住宅や借上げ住宅に分散して生活していたため、子どもたちは放課後や休日に自分たちで一緒に勉強したり、遊んだりすることが物理的に難しい状況にありました。

そこで、郡山市やその隣町である三春町で生活している子どもたちを対象とした学びと遊びの支援『学習サポート』『こども広場』を始めました。2016年秋までは三春の里応急仮設住宅集会所にて、現在は同じ三春町内の平沢復興公営住宅に場所を移して行っています。

「今日学校でこんなことがあったよー」開口一番スタッフに笑顔で話しかける子、自分のお気に入りの場所を確保して静かに過ごす子、子どもたちの様子は様々です。ただ、共通して言えることは、この場所が子どもたちにとって安心して自由に過ごしても良い空間となっているということです。私たちは、子どもたちにとって日常の様々なストレスから解放され、安心して過ごせる居場所が必要だと感じて活動を続けています。



居場所支援・ふたば開成楽舎 (郡山市)

ビーンズふくしまの郡山事務所内にて週2回、夕方から夜にかけて小学生から高校生までの子どもを対象とした居場所活動『ふたば開成楽舎』を実施しています。以前、郡山市内の仮設住宅での学習支援で関わっていた子どもたちが通っています。月に1回のイベントは、料理企画が恒例です。七夕やお月見などの季節行事や近くの公園で運動することもあります。



活動を通して、子どもたちは成長しています

私たちの活動には取材や視察、ボランティアとして様々な方が来られます。以前、子どもたちの中には、明らかに外部から来られた方を避けたり、拒否したりする行動が見られました。避難者だと思われること、避難者と見られるつらさ、よく知らない初めて会う人への警戒などが理由なのかもしれません。そんな時、私たちはどんな思いからの行動なのかあえて問うことはしません。その子が自分から何か話してきたら、真剣

に聴きます。子どもは私たちに、自分の抱える気持ちを解決してほしいのではなく、受け入れて共感してほしいのではないかと考えているからです。

しかし最近、外部からの訪問者に対して、子どもたちがそのような行動をすることがなくなってきた感じがします。経年による成長も当然ありますが、普段接している子どもたちは、年相応の悩みや不安を抱えながらも、その笑顔は明るくとも元気です。

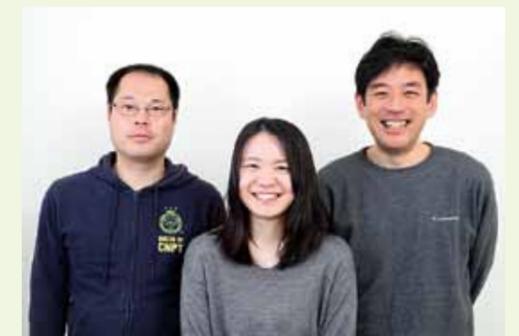


子どもたちは案外大人以上に環境に順応していくのかもしれない。

担当スタッフの声

豊かに実った作物と子どもたちの成長

農業体験イベントは、子どもたちにとって作物の成長を通して自然科学や農業について楽しく学ぶ貴重な体験だったと感じます。「わーっ。このズッキーニこんなに大きく育ったよ!」子どもたちの歓声があがります。土に触れ、豊かに実った作物の成長を肌で感じ、普段体験することのできないわくわく感や達成感、食への感謝など様々な思いを抱く機会となったのではないのでしょうか。農業を指導してくれる地域の頼れる大人との交流、共同作業を通して自分も農作業と一緒にしているのだと感じてくれたらうれしいです。



2011年

・借上げ住宅に居住する子ども向けのイベント活動開始

2012年

・ビーンズふくしま郡山事務所内にて、子ども向けの居場所活動開始
・富岡町社会福祉協議会おだがいさまセンター、三春町熊耳仮設住宅にて、子ども向けイベントや居場所活動を実施

2013年

・三春町三春の里仮設住宅にて、放課後の学習と遊びの活動開始

2015年

・ふたば開成楽舎開始

2016年

・ワールド・ビジョン・ジャパンとの協働事業「福島子ども支援事業」開始 (~2018年3月)

2017年

・三春町平沢復興公営住宅にて、放課後の学習と遊びの活動開始

支援活動の展開

震災発生後から取りくんできた学習と遊びの支援に加えて、子どもや地域につながる新たな**展開**がありました。

さらに、**子ども** とのつながりを



あつまっぺ交流館(福島市)での活動

仮設住宅や復興公営住宅以外にも避難している子どもたちはいます。これまでの仮設住宅などに特化した活動だけではなかなかつながりなかつた避難している子どもたち、そして避難先の地域に元々住んでいる子どもたちとの交流も目的に、福島市にある浪江町の交流施設「あつまっぺ交流館」で活動を行いました。避難している子どもだけでなく、近くに住む子どもたちも参加するようになり、楽しい時間を過ごしました。



交流を深めるイベント

避難している子ども × 地域の子ども

避難が長期化する中、避難している子どもたちは避難先の地域で暮らしていかざるを得ない状況が続いています。しかし様々な事情により、避難している方とその地域に住む方との間には、物理的にも心理的にも分断が生じてしまうことがありました。

そこで、避難している子どもと地域に住む子どもが交流する機会を多く作ることで、融合した地域コミュニティを作れば、という思いから、多くの子どもたちが参加できるイベントをたくさん開催してきました。毎回笑顔いっぱい遊ぶ様子がたくさん見られました。

さらに、**地域** とのつながりを

浪江小・津島小での活動

震災と原発事故により休校していた浪江町立浪江小学校と津島小学校。現在は二本松市にある廃校により使われなくなった校舎に仮校舎を設けて、2つの小学校合同で授業を行っています。これらの学校へ放課後に訪問し、主に低学年の子どもたちの宿題や遊びの見守りを行いました。子どもたちのより良い成長を目指して、学校とも協力して活動を行ってきました。



大人も子どももともに

仮設住宅から復興公営住宅などへ暮らしの場が変化してからも、子どもたちを見守っている家族や地域住民の方々とのつながり、子どもたちと一緒に参加できる様々なイベントを開催してきました。つながりを感じられるコミュニティの中で、大人も子どもも安心して暮らしていくことができるように、夏には流しそうめんを行ったり冬には餅つき会を行ったりなど、季節のイベントを通じて笑顔あふれるひとときを過ごしてきました。このような地域とのつながりを重ねる中で、新たに活動に参加するようになった子どもたちもいました。



子どもたちの声をお届けします

これまでを振り返って、活動に参加したことで色々な人と仲良くなることが楽しく感じました。数学で出来なかったところが出来るようになったので、参加して良かったと思いました。

(高校生)

これまで学習支援に参加して分からない問題が少しずつ分かるようになったし、自分1人ではあまり手をつけられない教科もやることができました。また、季節にあった行事を友達と一緒に楽しむことが出来ました。この活動は家にいたら何もしないであろう時間を遊んだり勉強したりできたので、参加して良かったです。

(高校生)

勉強会が終わった後の掃除の時間に、誰が掃除機をかけるか決めるゲームが楽しかったです。この勉強会に参加して、外に出る機会が出来たし友人に会えることで楽しく勉強出来ました。これらを通して、家にいる時よりも明るくなりました。出来れば、高校生になっても参加したいです。

(中学生)

勉強会に参加して良かったことは、友達に会えたりおしゃべりしたりして楽しかったことです。友達と外で遊んだり、宿題を教えたり教えたりして色々な経験が出来たから、自分の性格が明るくなったと思います。

(中学生)

支援活動の継続

そして、新たな暮らしへ

暮らしの場所とカタチは日を追うごとに変化していきます。仮設住宅での生活にやっと慣れてきた中、多くの子どもたちはまた新たな暮らしのステージを迎えています。

仮設住宅

避難先に購入した家へ

完成した復興公営住宅へ

仮設の閉鎖に伴い、避難先に借りたアパートへ

このような変化の中で、今も仮設住宅で暮らしている子どもたちがいます。これらの子どもたちにとっても環境の変化はとても身近なもの。同じ仮設住宅に住んでいた人たちが次々に転居していき、これまで培われてきたコミュニティが急速に失われていくという暮らしの変化を迎えているのです。一方で、避難先に家を購入して転居した子どもの中には、これまで通っていた生徒数が少ない学校から、市街地にある生徒数が多い学校への転校を余儀なくされる子どももいます。このような環境の変化を繰り返す子どもには、拠り所となる何らかのサポートを継続して行うことが必要です。

暮らしの変化とともに、子どもたちは日々成長しています。その成長に立ち会わせてもらい、見えてきたことを社会へ伝え、子どもたちを見守っていきます。



これまでの活動から見てきた、

これから福島で生きる子どもたちのために必要なこと

① 地域に住む全ての子どもたちのための居場所づくり

避難してきた子どもたちは、避難先の新たなコミュニティでの生活が始まっています。そこでは、様々な分断を乗り越えて、避難している子どもたちだけではなく、そのコミュニティ全体の子どもたちのための健やかな成長を見守る居場所が不可欠ではないかと考えています。避難している子どもたちとその地域に住む子どもたちが勉強や様々な行事を通して交流し、その地域で暮らしていくためのサポートがこれからも必要です。



② 新しい学校へ転入・進学するためのサポート

これまで、避難している多くの子どもたちは避難先にある被災前に通っていた学校の仮校舎に通っていました。そこでは、皆が被災・避難という経験をして、ごく少人数で学校生活を送ってきました。

しかし、今後はさらなる転居や進学で、大人数かつ同じ体験を共有していない生徒がいる学校へ進学する可能性が高くなります。慣れた場所から新たな学校生活へ、新たな環境での生活に寄り添うサポートが不可欠です。

③ 慣れた場所から、新たなコミュニティへ移った後の寄り添い

新たな家、新たな学校、新たなコミュニティへ。これらの移行には時間がかかります。新しい環境での生活に気持ちが追いつくのに時間がかかります。そこに寄り添う支え手や居場所がまだまだ必要です。学校卒業を機に私たちの活動から一旦離れた子どもが、近況を話しに來たり、つらいことや悩みを相談しに來たりすることで、再びつながれる場として存在していくことが必要です。



これらの取り組みは、今後別の地域で災害が起きた際にも役に立つものではないでしょうか。

子どもたちが持っているレジリエンスを引き出すものへ ～活動をふりかえって～

レジリエンスとは、人が本来持っている回復力のことです。私たちは、人はレジリエンスを発揮することによって困難を乗り越えていくことができると考えています。

大規模な災害と原子力発電所の事故。子どもたちは、生活そのものが不安定で脅かされる中、心と身体の健康や学びの環境、遊んだり、友達との大切な時間を過ごしたりといった、子ども期に当たり前に保障される権利が守られていませんでした。これまでの取り組みを振り返ると、一連の実践は、災害時や緊急時の子ども支援の在り方やその後の中長期を見越した子どものケア体制に関わる重要な価値・テーマを含んでいると改めて認識しました。

さらに、この活動は、子どもたちが持つ権利の一つ一つを回復させていくとともに、子どもたちが本来持っているレジリエンスを引き出すものへとなっていったのです。

現在においても、放射線に起因する不安や後発性の健康被害への不安、今でも故郷に帰ることが出来ず、仮設住宅や避難先の公営住宅で暮らさざるを得ない方々の存在など、まだ現在進行形の課題があります。そうした環境下での子どもたちの育ちやケアを考えた場合、これからも子どもたちの生活に寄り添った、安心で安全な居場所が必要とされています。

福島子ども支援事業の取り組み

期間：2016年4月～2018年3月

NPO法人
ビーンズふくしま



NPO法人
ワールド・ビジョン・ジャパン



ビーンズふくしまとワールド・ビジョン・ジャパンは、
福島県の子どもが生きる力を育み豊かな人生を送るために
必要な支援を提供するため、協働で活動をしてきました。

協働

活動と一緒にいる



「仮設住宅等で生活する子どもへの支援」と「生活困窮家庭協働の子どもへの支援」を協働で行いました。

学び

お互いの強みを学び合う



ビーンズふくしまからは現場でのノウハウを、ワールド・ビジョン・ジャパンからは広報などの団体運営についてお互い学び合いました。

発信

ブログや製作物などで活動を伝える



協働で行ったイベントや普段の活動について、ホームページや本、小冊子などで発信してきました。

コラボ

企業と一緒にイベントを行う



この事業をご支援くださった株式会社チュチュアンナ様ご協力の下、靴下をデザインするイベントを開催しました。



これからも子どもたちが笑顔でありますように。

特定非営利活動法人
ビーンズふくしま



NPO 法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもや引きこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、ひとりひとりに寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

特定非営利活動法人
ワールド・ビジョン・ジャパン



ワールド・ビジョンはキリスト教精神に基づいて開発援助、緊急人道支援、アドボカシー（市民社会や政府への働きかけ）を行う国際 NGO です。子どもたちとその家族、そして彼らが暮らす地域社会とともに、貧困と不正を克服する活動を行っています。宗教、人種、民族、性別にかかわらず、すべての人々のために働きます。

特定非営利活動法人 ビーンズふくしま
〒960-8066 福島県福島市矢剣町 22-5 TEL024-563-6255 <http://www.beans-fukushima.or.jp>

特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン
〒164-0012 東京都中野区本町 1-32-2 ハーモニータワー 3F TEL03-5334-5357 <https://www.worldvision.jp>